

元屋敷窯と織部の時代

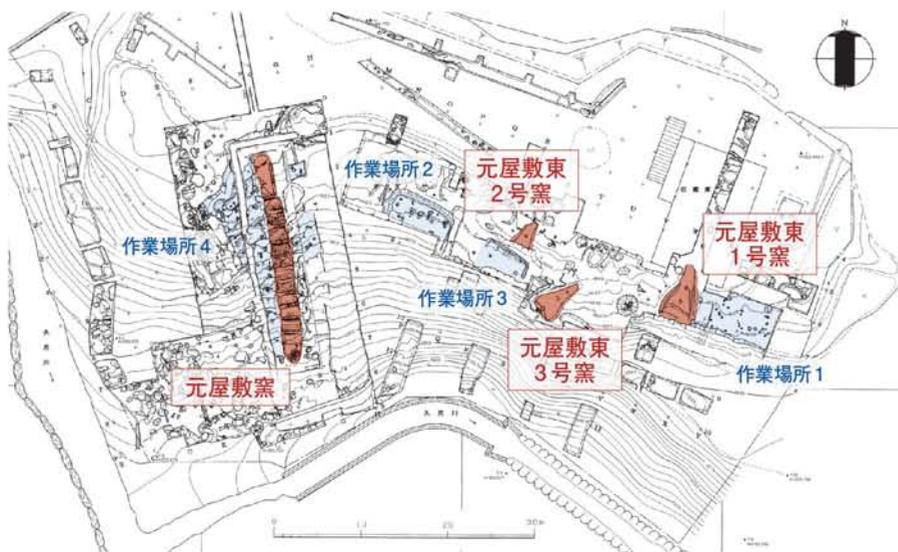
土岐市美濃陶磁歴史館



元屋敷陶器窯跡

岐阜県土岐市泉町久尻に所在する元屋敷陶器窯跡は、昭和42年に国の史跡に指定されました。史跡整備に際して発掘調査を実施したところ、焼成室が単室の大窯である元屋敷東1号・2号・3号窯と、14の焼成室をもつ連房式登窯の元屋敷窯で構成される古窯跡群であることがわかりました。16世紀後半から17世紀初頭まで継続して操業しており、茶陶や会席食器を中心に、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった美濃桃山陶を生産していました。特に元屋敷窯で焼かれた織部は、多くの伝世品が残されていることから優品であったと考えられます。

元屋敷陶器窯跡は、昭和6年に多治見工業学校（現多治見工業高等学校）、昭和8年に岐阜県文化財調査委員であった小川栄一による調査、昭和24年に美濃陶祖奉賛会、昭和33年に名古屋大学、そして平成5年から6次にわたり土岐市教育委員会によって発掘調査が行われました。出土した資料は、近世窯業史を解明する資料として、さらには当時流行した茶の湯の文化を伝える貴重な資料として、平成25年に陶器および窯道具・窯材あわせて2,431点の出土資料が重要文化財に指定されました。



元屋敷窯跡の遺構配置図

元屋敷窯の陶祖

元屋敷窯の名前は、窯屋敷があった場所に築かれたことによると伝えられています（写真1）。元屋敷窯の陶祖は加藤景延とされ、後陽成天皇に白薬手の焼物（志野か？）を献じたことにより、慶長2年（1597）に筑後守に任ぜられたとされています（写真2）。また、陶祖の菩提寺・清安寺三世高岩禅英の書き記した「当寺由来記」貞享3年（1686）を元に書かれたとされる「瀬戸大窯焼物並唐津窯取立之来由書」には、景延が、九州唐津で連房式登窯を学んで帰り、美濃に最初の連房式登窯を築いた経緯が記されています（写真3）。昭和25年に12代陶祖を継承した加藤景秋（1899-1972）は、技術の途絶えてしまっていた美濃桃山陶の復興に尽力し、志野・織部の技法で岐阜県重要無形文化財保持者に認定されました。



写真1：元祖窯屋敷図（岡田家過去帳写）

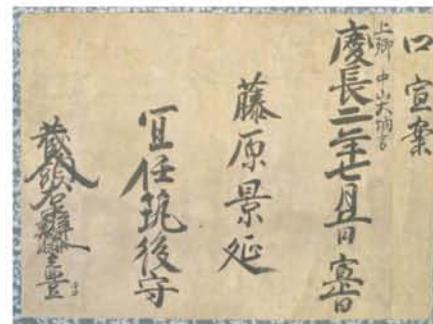


写真2：口宣案

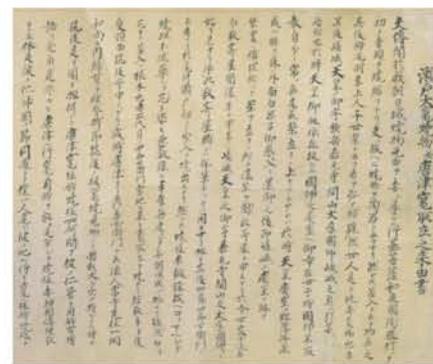


写真3：瀬戸大窯焼物並唐津窯取立之来由書

元屋敷東1号窯

【窯 体】大窯(2度の改築。1回目改築B窯、2回目改築C窯)

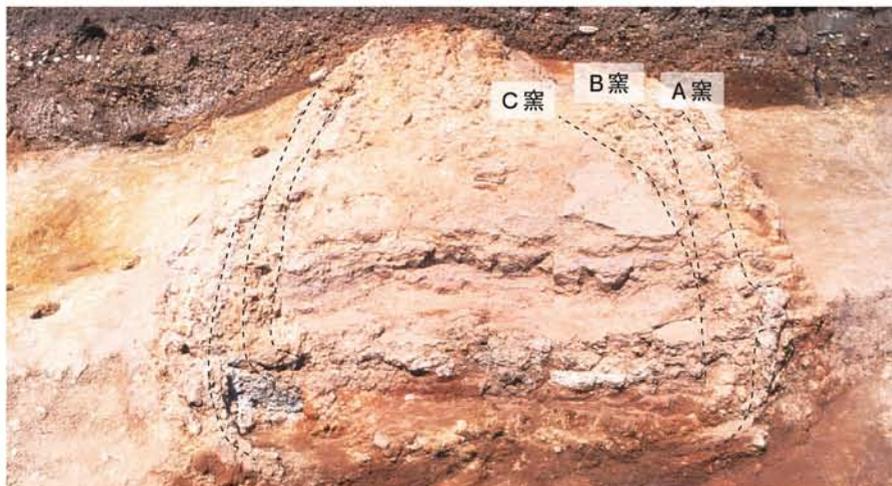
残存最大幅：A窯3.9m B窯3.36m C窯3.0m

【主な製品】A窯：天目茶碗、皿類、搦鉢など

B窯：天目茶碗、皿類、搦鉢の他、黄瀬戸、瀬戸黒、志野など

C窯：志野、織部黒など

【操業時期】A窯：16世紀後半 B窯：16世紀末から17世紀初頭 C窯：17世紀初頭



元屋敷東1号窯跡



元屋敷東1号B窯の製品



元屋敷東1号A窯の製品



元屋敷東1号C窯の製品

元屋敷東2号窯

【窯 体】大窯 残存最大幅：3.9 m

【主な製品】天目茶碗、皿類、搦鉢の他、黄瀬戸、瀬戸黒、灰志野など

【操業時期】16世紀後半から末



元屋敷東2号窯跡



元屋敷東2号窯の製品

元屋敷東3号窯

【窯 体】大窯 残存最大幅：3.0 m

【主な製品】志野、織部黒など

【操業時期】17世紀初頭



元屋敷東3号窯跡



元屋敷東3号窯の製品

元屋敷窯

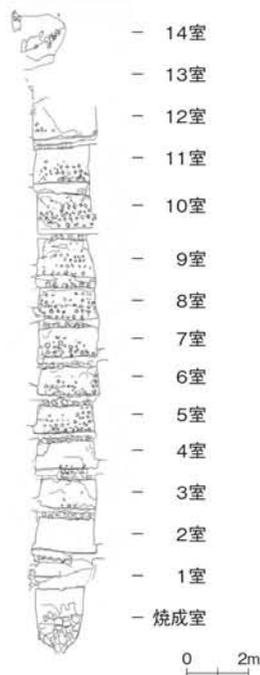
【窯 体】連房式登窯 横挟間構造 全長24 m

【主な製品】織部など

【操業時期】17世紀初頭



元屋敷窯跡



元屋敷窯の製品

京都三条通出土の美濃桃山陶

京都市中京区三条通^{かいわい}界限の中之町、福長町、下白山町、弁慶石町から大量の陶器が出土しています。その内容は、唐津、高取、備前、信楽、伊賀、美濃といった産地の桃山茶陶でした。その中でも中之町出土の陶器は、美濃の製品が圧倒的に多く、全体の8割を占めていました。それらの美濃製品は、黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部の茶碗、向付・鉢、水指といった茶陶がほとんどで、特に元屋敷窯の製品と思われるものが多く含まれていました(写真参照)。これら4地点の出土状況から、三条界限にやきものを商う店舗があったと考えられています。

やきものを扱う商人の存在は、慶長末期の頃に描かれたとされる「洛中洛外図屏風」に、やきものを並べる店舗の様子が描かれていることや、寛永元年から3年(1624-26)に刊行された地図『都記』に、三

条通沿いに「せと物や町」と記載されていることから明らかとなりました。

三条界限から大量に出土した茶陶からは、やきものを扱う商人たちが、当時の流行を意識して、好みの意匠のやきものを注文したりするなど、生産地との関係をもって製品を作らせ、競い合って商売を行っていた様子が見て取れます。



中之町遺跡出土(写真提供:公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

美濃桃山陶 <元屋敷陶器窯跡出土品(重要文化財)>

黄瀬戸

「瀬戸より来たる黄色のやきもの」という意味でつけられた名称で、瀬戸と美濃の区別がなされていなかったことに起因します。黄瀬戸の釉薬は従来の灰釉ですが、釉の調合や焼成具合によって釉肌が様々です。主な器種は鉢、向付などの会席用食器で、他にも花入、水指、香炉、香合などの茶陶が生産されています。黄瀬戸は当初、青磁を意識したやきものでしたが、刻線で文様を施し、鉄の茶色・胆礬の緑色が加わることで三彩陶となり、華やかさのあるやきものになりました。しかし、志野が量産されるようになると黄瀬戸は姿を消していきます。



黄瀬戸花入



黄瀬戸水指



黄瀬戸鉢



黄瀬戸鉢(片)

瀬戸黒

黄瀬戸と同様、瀬戸の黒色の茶碗という意味でつけられた名称です。焼成中に窯から取り出し、急冷させることで漆黒色となります。器種は茶碗に限定されます。黒色で筒形の器形は、千利休が作らせたといわれる楽茶碗に共通しており、利休好みという当時の流行が美濃窯にも波及していることが伺えます。腰部からまっすぐに立ちあがったシンプルな筒形の瀬戸黒は、ヘラ削りを施したりロクロ目を強調したりするなど造形に作為が加わるようになり、やがてより作為の強調された織部黒へと変化していきます。



瀬戸黒茶碗



瀬戸黒茶碗



瀬戸黒茶碗



瀬戸黒茶碗

志野

志野は長石を釉薬とする白いやきものです。志野という名称の由来は明らかになっていません。志野に先行するものに灰志野がありますが、長石釉に灰分を多く含むため青味がかかった釉調で、器形は黄瀬戸に類似しています。志野の器種は大きく分けて、白磁や染付といった中国陶磁を意識した丸皿などの量産品と、茶碗、鉢、水指などの茶陶製品があります。志野は成形技法や装飾技法によって以下のように分類されています。さらに、登窯で焼かれたものは「志野織部」として分類されています。

無地志野	文様の描かれていないもの。
絵志野	釉下に鉄絵具で文様を描いたもの。
鼠志野・赤志野	素地に鉄絵具を塗り、掻き落としで文様を描いたもの。 赤志野は鼠色ではなく、赤く発色したものをいう。
練り込み志野	異なる胎土を練り込んで成形したもの。



灰志野向付



志野茶碗(無地)



志野茶碗(絵)



志野向付(絵)



志野向付(絵)



鼠志野向付



志野大鉢(絵)



志野向付(練り込み)



鼠志野大鉢



(上写真・裏面)

織 部

黄瀬戸、瀬戸黒、志野の技法を駆使し、造形に作為を加えた斬新なデザイン^{ざんしん}のやきものが織部です。織部は連房式登窯で焼かれましたが、織部黒についてはすでに大窯で焼かれ始めています。織部は色彩、技法によって以下の9種類に分類されています。



織部黒茶碗

織部黒
(黒)

瀬戸黒に比べ、成形の際の変形やヘラ削りなどによる強い作為が加わったもの。



黒織部茶碗

黒織部
(黒+白)

織部黒の技法に、掻き落とし文様や釉の掛け残り箇所^{箇所}に鉄絵などの文様を施したもの。



赤織部平碗(岐阜県立多治見工業高等学校蔵)

赤織部
(赤)

赤土で成形したもの。文様は鉄と白泥で施す。



志野織部向付

志野織部
(白)

志野の技法と同じ。登窯で焼かれたものを指す。



青織部向付

青織部
(青+白)

志野織部に銅緑釉を装飾的に施したもの。

総織部
(青)

銅緑釉を総掛けしたものを「総織部」に分類する。



鳴海織部向付

鳴海織部
(青+赤)

白土と赤土の異なる胎土をつなぎ合わせて成形したもの。白土の箇所には銅緑釉が掛かる。



美濃唐津花入

美濃唐津

唐津焼の作風を模したもの。



美濃伊賀水指

美濃伊賀

伊賀焼の作風を模したもの。

古田織部

古田織部(1543-1615)は、美濃の出身といわれ、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国時代の武将です。千利休に茶の湯を学び、利休亡き後、天下一の名声を得て、江戸幕府2代将軍徳川秀忠の茶道指南役を任されたほどの人物です。しかし、1615年に大阪夏の陣で豊臣方に内通し、謀反を企てたとして切腹を命じられ、73年の生涯を閉じました。

【天下一茶人と織部焼】

織部焼の名称は古田織部の名前に由来しています。しかし、織部焼が生産されていた当時は名もなく、さらには織部焼を含め、美濃で焼かれたものすべてが瀬戸物として流通していました。

織部焼が織部と呼ばれるようになるのは江戸時代中頃のことです。古田織部の好みを反映したやきものとして、後世の茶人が織部焼と名付けたものと考えられています。やきものに過去の時代の人の名が付けられるほど、織部の活躍が伝えられていたことがうかがえます。

その伝承の一つに、文禄・慶長の役で朝鮮半島から捕虜として連れてこられた儒学者、姜沆の書いた『看羊録』があります。そこに日本の風俗について次のように書かれています。

倭[の風]俗では、あらゆる事からや技術について、必ずある人を表立てて天下一とします。ひとたび天下一の手を経れば、[それが]甚だしく粗悪で、甚だしくつまらない物であっても、必ずたくさんの金銀でこれを高く買入れ、天下一の手を経なければ、甚だ精妙[な物]であっても、ものの数ではありません。(中略)

堀田(古田か)織部なる者がいて、ことごとくに天下一を称しております。花や竹を植えついたり、茶室をしつらえたりすれば、必ず黄金百錠を支払って[彼に]一度鑑定を求めます。炭を盛る破れ瓢、水汲み用の木桶でも、もし織部がほめたとなれば、もうその価値は論じるところではありません。

古田織部は天下一茶人との評価を受けており、茶に関する事柄については高額な鑑定料を払って必ず織部の意見を求める。織部が良いと認めたものは、どんな粗末なものであってもたくさんの金銀で売り買いされるというのです。こうした状況下で織部好みの茶道具が、全国の窯場で商品化されていたのではないかと考えられます。

古田織部が天下一茶人として活躍していた慶長期(1596-1614)は、元屋敷東窯・元屋敷窯の稼働期でもあり、元屋敷窯で生産されていた織部焼が、古田織部の好みを反映したやきものであったことは言うまでもないでしょう。

【織部の日】

慶長4年(1599)2月28日、古田織部が京伏見にて毛利輝元、小早川秀包、そして博多の豪商、神屋宗湛を招いて茶会を開いた時の記録(茶会記『宗湛日記』)が残されています。その茶会記に、

「ウス茶ノ時ハ セト茶碗 ヒツミ候也 ヘウケモノ也」

と書かれており、薄茶の時には瀬戸茶碗が使われ、その茶碗は、歪んでいて、ひょうげた形をしていたというのです。

当時、美濃焼は瀬戸物として流通していましたから、ここに書かれている「セト茶碗」は美濃焼のことを指しています。(当時の瀬戸窯では形の歪んだ茶碗は焼かれていません。)形が歪んでいたということは、おそらく作為に富んだ志野茶碗や織部黒茶碗ではなかったでしょうか。この記録を織部焼が初めて史実に登場した日として、土岐市は平成元年に2月28日を「織部の日」として制定しました。



古田織部消息 (神屋宗湛に宛てた手紙)



古田織部作茶杓 (筒 武者小路千家六世好々斎仁翁宗守 (1795-1835) 筆「古織乃作 (花押)」)

関連年表

西暦 (和暦)	窯業史・茶道史関連	古田織部
1543 (天文12)		誕生。名は佐介、景安
1567 (永禄10)		この頃、織田信長に属するか
1572 (元亀3)	茶会記に瀬戸天目の初見 (『天王寺屋会記』)	
1582 (天正10)		豊臣秀吉に仕える 利休書状に名が見える
1584 (天正12)		8.28利休を茶に招く 10.15秀吉茶会に参加 (『天王寺屋会記』)
1585 (天正13)	千宗易、利休居士号を勅賜される	
1586 (天正14)	茶会記に「宗易形ノ茶ワン」(『松屋会記』)、 瀬戸水指 (『今井宗久茶湯日記書抜』) の記載 秀吉、黄金の茶室で茶会を催す	
1587 (天正15)	秀吉、北野大茶会を催す	
1588 (天正16)	山上宗二、『山上宗二記』を記す	4.14 聚楽行幸に参列
1590 (天正18)		北条攻めに従軍、利休の織部宛書状 (武蔵 鏡の文) に竹花入が見える
1591 (天正19)	千利休、自刃	2.13 織部と三斎、利休を淀で見送る
1592 (文禄元)		肥前名護屋に出陣 (織部陣)
1593 (文禄2)	文禄二年銘黄瀬戸皿 (窯下窯)	
1594 (文禄3)		6.25 伏見の徳川家康に招かれる
1596 (慶長元)	この頃から「今焼茶碗」が茶会記に出現	小堀遠州に茶の指導 (『桜山一有事記』)
1599 (慶長4)	2.28 毛利輝元らを招いた茶会で「セト茶碗 茶碗を使う (『宗湛日記』) 3.22 「伏見より織部ト云茶の湯の名人来候」 (『多門院日記』)	ヒツミ候也 ヘウケモノ也」と記された 3. 小堀遠州らと吉野で花見
1600 (慶長5)	この頃から「織部茶会記」に唐津焼の名が記載	関ヶ原に徳川方に属し、1万石に増加
1602 (慶長7)	茶会記に「三角ノ伊賀筒」三角筒花入 (『織部茶会記』)	
1603 (慶長8)	慶長八年銘黄瀬戸向付 (京都市)	
1604 (慶長9)		小堀遠州に茶湯の心得をとく (『慶長尋書』)
1605 (慶長10)	慶長十年銘志野扇面向付 この頃、加藤景延が元屋敷窯を開窯	4.5 徳川秀忠、織部邸を訪れる
1607 (慶長12)	慶長十二年銘匣鉢 (元屋敷窯)	
1610 (慶長15)		8.20 江戸に赴き將軍秀忠に台子を伝授
1612 (慶長17)	慶長十七年銘織部獅子紐香炉 (伝世品) 慶長十七年銘美濃伊賀水指 (元屋敷鉢)	「織部者 当時数寄之宗匠也 幕下甚崇 敬之給」 (『駿府記』)
1613 (慶長18)		大坂城で織田有楽斎と豊臣秀頼に献茶
1614 (慶長19)	慶長十九年銘匣鉢片 (窯ヶ根窯) 慶長銘乳棒 (元屋敷窯)	大阪冬の陣で負傷、家康より薬を贈られる
1615 (慶長20/元和元)	慶長二十年銘志野鉢	6.11 自刃
1622 (元和8)	元和八年銘志野織部台付碗 (元屋敷窯)	



発行日 2014年9月4日
編集・発行 岐阜県土岐市泉町久尻1263
公益財団法人 土岐市文化振興事業団
土岐市美濃陶磁歴史館
0572-55-1245
助成 とうしん地域振興協力基金
印刷 西濃印刷株式会社